

アマゾン「お坊さん便」に噛みついた 全日仏の本末転倒な誤謬

行政書士・葬祭カウンセラー 勝 桂子

二〇一五年十二月八日、インターネット通信販売サイト「アマゾン」で、「お坊さん便」というサービスの販売が開始された。申込者の自宅などへ、名前の通り僧侶を「派遣」し、法事などを執り行うというサービスで、三万五千円という「定価」がつけられている（出品したのは東京都新宿区にある葬祭事業者「株式会社みんれび」

で、アマゾンによる事業ではない）。

これに対して同年十二月二十四日、日本の伝統仏教宗派などでつくる公益財団法人全日本仏教会（全日仏）は、「宗教行為としてあるお布施を営利企業が定額表示することに一貫して反対してきました」「Amazon」の、宗教に対する姿勢に疑問と失望を禁じ得ません」と齋藤

明聖理事長による懸念の声明を発表。翌一六年三月四日には、アマゾンに同サービスの販売停止を求めめる文書を提出している（本稿執筆時点までにアマゾンは「お坊さん便」の販売をとりやめてはいない）。

インターネットを介して僧侶を「定額派遣」というビジネスは、理容界に置き換えると、つまりは「千

円理髪店」である。ものすごい技術を持った人に当たる可能性もゼロではないが、さして腕が感じられなくても、文句を言う人はいない。そもそも美容に気を遣う人であれば、理髪店ではなく美容室を選び、自分で熱心に情報を集め、あちこちの美容室にも通ってみて、「この人にお願したい」と思える美容師を探すだろう。苦心して見つけた美容師が「別の町で自分の店を持つ」といった動きを見れば、それを応援し、新しい店にも出向いて散髪をお願いすることになるだろう。

これを言い換えれば、つまり仏教に強い関心を持って人ならば、日ごろからさまざまな寺院の写経会や法話会に通い、「この寺の住職に自分の葬儀は依頼しよう」と決めていくのではないのだろうか。格式の高い有名寺院に墓を持ち、高い質の

儀礼を行ってもらい、結果としてそれに見合った高額のお布施を払って深い宗教的満足感を得るといふ行為は、カリスマ美容師をコネで紹介してもらい、大枚をはたいてカットしてもらおうことを誇りにするのに近い。

前述の通り全日仏は、アマゾンに出品された「お坊さん便」に対して販売中止を求めているが、論点を見誤っていると言わざるをえない。それを利用する一般の市民からすれば、「いろいろあって、みんないい」。そもそも商業資本は黒字の見込みないサービスには手をつけない。「お坊さん便」は、利用する市民から見ても登録する僧侶から見ても、需要があるから成立しているのである。

私は二〇一一年に出版した『いいお坊さんひどいお坊さん』（ベスト新書）の中で、「近親者が亡くなると

きくくらいは定額や目安に頼らず、「お気持ちの量」を推し量るべき」と主張した。だがそれは、「檀家が減って寺を維持できなくなったら、お袈裟一つで寺を出て、ありがたい教えを広めるために一人でも行脚する覚悟です」という意識を持つ寺院住職を前提にした話である。そうした覚悟があれば、通夜葬儀で五千円しか包めない困窮者がいたとしても、ありがたいお布施として受け取ってくださるであろう。だが実際、それができる僧侶は三割にも満たないという実感である。

求道か護持か

現在、日本の住職たちから聞こえてくる声の大半は、「人口減で十年後の寺の運営が不安」「これ以上檀家が減ったら困る」など、あくまで

「自分の宗教法人を維持することへの心配である。宗教的な求道より、寺を維持することがまず先なのである。だとすれば、『寺という建物』を維持する最低限の収入をどう賄うのかという視点から、葬儀や法要の布施の「目安」なり、「定価」なりを、檀家に示していく必要もあるのではないだろうか。

全日仏はアマゾンへの「販売中止のお願い」の中で、「日本の伝統ある仏教界は、お一人おひとりがご懇念をもって進納された『お布施（懇志金）』によって寺院を維持し、教えを広め、仏法を相続してきました」と主張する。ここでも「寺院を維持」することが「教えを広め、仏法を相続」することの前提条件であるとの認識に立っている。しかし宗教というものは、布教伝道の間があつて生じるのではない。教えが尊いから、

その教えを求める人々の声に応じて場ができるのだ。

振り返れば、明治の廃仏毀釈と戦後の農地解放を経て、江戸時代までの寺院経営を支えた財は半減している。加えて、何かの祭礼のたびに大金を志納できるように大商人や大農家が、どの町にも数軒いるような時代でもなくなった。そういう負担を、大半が中流以下のサラリーマン家庭となつた一般信徒に押しつけ続けてきたことのゆがみが、株式会社による「お布施の定額表示」という形で露出したのである。

「お坊さん便」については、僧侶側の需要も少なくない。たとえば檀家数の少ない寺院の住職や過疎地域に暮らす僧侶らは、僧侶派遣ビジネスを行う業者などに数多く登録し、月に数度の依頼を受けて数万円のお布施をもらい、それでようやく所属

宗派への志納をクリアし、平日は副業をして食いつないでいるというのが実態だ。問題なのはむしろ、全国七万五千カ寺、率にして全国寺院の九割を束ねると称する全日仏が、そうした困窮寺院の現状掌握や救済策を提示することもなく、また市民感情や世間の需要をくみ取る試みも見せないまま、一方的にアマゾンへ「お坊さん便」の販売停止を求めた短絡さである。

仏の道は、あらゆる事象を縁起により起こるべくして起こつたことと「明らめ」、否定しないところに本来の価値がある。全日仏は、僧侶派遣サービスの出現も定額表示も、それ自体が縁起であると真摯に受けとめ、問題の本質がどこにあつたのかを丹念に探っていくべきだったのではないだろうか。

定価が炙り出す真価

私が最初にお布施の目安表示を目にしたのは、約二十年前のことである。関東近郊の寺院でだった。通夜や葬儀、回忌法要のお布施の目安額が「何万円」と一覧表で掲示されていて、親戚一同が「分かりやすくていいわね」と好意を示していたのを記憶している。住職は「目安を示さない」と今の人たちは判断に困るでしょう。近隣でも目安表示している寺院の方が多く、むしろ普通のことと感じています」と話していた。現場の声と全日仏の見解との間に、乖離が感じられる。

東京・新宿には、二十年前から定額の会員制による永代供養を受け付けている寺がある。都心にあつて、朝粥つきの坐禅会なども随時開催し

ている意欲的な寺だ。会員になるときは原則、生前受戒を求める。固辞する人には強要しないが、会員の九〇%以上が受戒済。院号は頼まれても与えないという。単に戒名を授かるだけではなく、半日かけて作務もきちんと行い、会員となる。毎月一度の荘厳な合同法要があり、その日に文化講座やミニコンサートも企画される。熱心な会員たちは、友人知人をも連れて訪れる。毎月、本堂がぎっしりと埋まるほどの人が、午後の半日をこの寺で過ごしていく。

この寺の事務担当者は、昨秋に起こつた某霊園の追徴課税のニュースを見て、「定額でどの宗派でも受け入れる」という方針が『宗教行為ではない』と判断され、税の支払いを求められたようだ。そうならばうちも危ない」と危惧していた。しかし私はきつぱりと言つた。

「万が一にも税務調査が入ったら、私を呼んでください。これだけきちり宗教儀礼をやっている寺がほかにありますか？ 定額の何がいけないのですかと明言します」

仏教の真髄は、差を取ること（「サトリ」）である。金を積めば院号がもらえるとか、「立派な墓石でないと成仏できない」などという言説がまかり通ることの方が、本来おかしな話だ。受戒儀式とともに寺の維持に必要な最低限の志納を定額でいただき、熱心な人は毎月の法要などで追加のお布施をしてくださいとお願い、というこの寺の方針の方が、ずっと正しいと私は断言できる。

「一読み何万円」という従来のお布施の慣習額は、二十年間のデフレを経過した現在の日本国民の多くにとって、すでに「ご懇念をもって進納」されるような額ではない。しか

を取材し、葬儀には二つの面があると述べている。死別という破壊的な現実の前に、穢れなどの存在を認め封じ込める第一の段階。そして、その破壊的現実を食い止め、死者を次なる生命と豊穣の源と位置づけ、社会秩序のなかへ統合させゆく第二の段階。葬儀が簡略化されても、この二つの面が機能していれば、葬儀自体がグリーンフケアの側面を持つと言える。

日本の葬儀は簡略化が進行しているが、国民の靈魂観がゼロに近いかといえ、そうではない。たとえば故人の遺志に従い、葬儀を行わず散骨をした人が、半年後や一年後に「故人はあの世でちゃんと成仏しているんでしょか」と不安がる、というのによく聞く話だ。インターネットでは怨霊話がヒートアップしており、この春には、死後にさまよ

う霊を四十九日までに成仏させる仕事人を描いたドラマ『お迎えデス。』が日本テレビ系列で放映されてもいる。特定の宗教は信仰していないものの、「あの世観」は現代日本人の精神に厳然と存在し、安寧に「成仏」することを求め続けている。

だが肝心の葬送儀礼は、商業資本に牛耳られてすっかり形骸化してしまつた。モリス・ブロックが示したように、死というショックな事実を、段階を経て徐々に受容させ、ゆるやかに日常生活へと回帰させていく力を、現在の日本の葬儀は持つていない。散骨や樹木葬といった自然葬が人気を博した背景には、「大自然の力でも借りないことには、故人があつた世へ無事に行けたという確信が持てない」という漠たる不安があるのではないかと私は感じる。

お布施の大半は、もはや「信心か

たり、というように、機に応じて葬儀の内容を変化させる。しかし、企業が提示した定額サービスでは、そうした「対機」が許容されない。サービスの内容が常に均一でなければ、「知人の葬儀の時は三十分も丁寧で読経していたのに、うちの時はどうして十五分なのか」というクレームが出かねない。商業資本はクレーム処理に割く費用を最低限に抑えなければ、商品の価格を安く据え置くことができない。商業資本による定額化は、寺院自らが定額化をしている場合とは意味が異なる。宗教者側に主導権があるならば、儀礼の主導権も常に宗教者にあり、「対機」が損なわれるということもない。

そもそも、葬送儀礼とは何のためにあるのか。アメリカの人類学者モリス・ブロックは、多くの部族が時間を経て二度の葬儀を行うこと

アマゾンに「お坊さん便」を出品している株式会社みんれびには、「シ

葬送儀礼の本質回帰を

しそこを、「先代と同じようにしななければ申し訳ない」「親戚の手前恥をかかないように」「総代さんが相場と云うから仕方なく」といった事情で、かなり無理をして包んでいく現実がある。

こうした時代の流れを鋭敏に感じとつた先進的な寺院が、前述のように何十年も前から「お布施の定額化」を推進してきた。そんな寺院の多くは、死別や老病死の苦しみを抱える信徒を癒すための儀礼や法話も丁寧に行っている。そうした場で定額に上乘せする形で志納されるお布施こそが、まさに感謝の念から進納された「グリーンなお布施」と言える。

ンプルなお葬式」という人気商品がある。類似の事業を大阪で展開する株式会社ユニクエスト・オンラインの「小さなお葬式」というサービスもあり、いずれも僧侶への謝礼が定額化されている。ただ筆者の知るある僧侶（生活困窮者の葬儀は葬祭ホールを用いず自分の寺で、出せる範囲の金額でしてしまふ柔軟な僧侶である）は、「懇意にしている葬儀社に頼まれ、そうした定額サービスを經由して申し込んできた方の葬儀を受けることもあるが、できればやりたくない」と話す。理由は「読経の時間も内容も厳格に決められ、私の裁量がまったくないから」。心ある僧侶であれば、たとえば若い人の突然死なら、来場者の気配が多少なりとも落ち着くまで読経をしたり、長年にわたる介護に疲弊した親族が中心の葬儀であれば労苦をねぎらう法話を短めに行つ

たり、というように、機に応じて葬儀の内容を変化させる。しかし、企業が提示した定額サービスでは、そうした「対機」が許容されない。サービスの内容が常に均一でなければ、「知人の葬儀の時は三十分も丁寧で読経していたのに、うちの時はどうして十五分なのか」というクレームが出かねない。商業資本はクレーム処理に割く費用を最低限に抑えなければ、商品の価格を安く据え置くことができない。商業資本による定額化は、寺院自らが定額化をしている場合とは意味が異なる。宗教者側に主導権があるならば、儀礼の主導権も常に宗教者にあり、「対機」が損なわれるということもない。

そもそも、葬送儀礼とは何のためにあるのか。アメリカの人類学者モリス・ブロックは、多くの部族が時間を経て二度の葬儀を行うこと

宗教の視点から社会をえぐる
ノンフィクション・マガジン

宗教問題

Vol.14 季刊2016年春季号

どこよりも早い「宗教的参院選予測」
問わ^れる^る 自民党公明派の存在理由 乙骨正生
安倍^政権の応援団「日本会議」の^{宗教}背景 菅野完
凋落一方の新宗連に^{参院}戦えるのか 江藤ゆかり
党^自今井絵理子^候 支援に^顕正会が動く^{可能}性 本郷四朗

大特集 追跡「僧侶派遣ビジネス」
「お坊さん便」VS 全日仏の
混沌たる北目東京を畫目きつくす！
インターネットは葬儀含む^て透明化する 八田知巳
「葬儀の定価をつくった男」が^語る仏教の大切さ 吉野明彦
派遣^{れる}僧侶の人生、カネ、そして信仰 古川琢也
檀家制度をやめた寺・見性院の未来航海図 小川寛大
ネット葬儀社が無視^{して}品質と敬意と順法 佐藤信顕

World Watch
軍事政権 VS ^{タイ}イスラモフオビア 藤井伸二
^米イスラモフオビア 村中璃子
ロシア・オウム^{残党}の現在 本誌編集



9784990852634



1920014009266

ISBN978-4-9908526-3-4
C0014 ¥926E

宗教問題
定価 926円+税

宗教問題

14

コラム
兵頭二十八／大月隆寛／慈永祐士／広尾晃
大特集 追跡、「僧侶派遣ビジネス」
勝桂子／八田知巳／小川寛大／吉野明彦／古川琢也／
佐藤信顕／吉川美津子
第2特集 どこよりも早い「宗教的」参院選予測
乙骨正生／菅野完／江藤ゆかり／本郷四朗
World Watch
藤井伸二／村中璃子
シネマ&ブック
古川順弘／古谷経衛
連載
富岡幸一郎／東佑介／堀雅昭／犬塚博英